《翻訳》

ダリット連帯プログラム報告（四・完）

一九九四―一九九五

桐村彰郎（訳）

目次

序文：バグワン・ダス　DSP代表
前置きの報告：ジェイムス・マッセイ　DSP名誉幹事・理事
プログラム優先ナンバー・ワン：
さまざまなダリット連帯プログラムの強化とネットワーク化
北西インド　（以上第一一巻一号）
西部インド
中央および北東インド
南部インド（詳細は女性および青年諸報告参照）
プログラム優先ナンバー・ツー：
ダリット共通イデオロギーに関する協議会
プログラム優先ナンバー・スリー：
ダリット・先住民全国協議会報告　（以上第一一巻二号）

プログラム優先ナンバー・フォー：
ダリット問題の国際化
女性プログラム
ダリット女性会議：ラクノウ
指導者訓練キャンプ：チャンガナチェリー
準地域の女性ワークショップ：パンジャブ州シャプール村
女性会議：プネー
マヒラ・ジャグラン：カラジア
エンパワーメント・プログラム
北京女性会議
DSP青年プログラム：年次報告
青年指導者訓練：ビネリ
パラライ村訓練プログラム
全国青年プログラム計画ワークショップ：ナグプール
マンナ・シン・ワラ村セミナー兼村落レベル訓練プログラム
村落レベル自覚化キャンプ：マクー
ダリット青年指導者訓練キャンプ：チャンガナチェリー（以上第一一巻三号）
ダリット連帯指導者およびエンパワーメント・プログラム：ナグプール
青年指導者訓練プログラム：ウスコタイ
新たなパラダイムの全国青年幹事会議
世界教会協議会総書記とその一行訪問時における演説の交換（以上本号）

ダリット連帯指導者およびエンパワーメント・プログラム：ナグプール

ダリット連帯指導者およびエンパワーメント・プログラムは一九九五年七月二七日から三〇日まで、マハラシュトラ州ナグプールのインド教会協議会（NCCI）で全インドダリット連帯プログラム青年派によって組織された。

最初の会議は午後五時に始まり、そこで全インドDSP青年部幹事Mr. A・ラメイアが開会演説でキャンプの主要テーマと目標に焦点をあてた。同時にさまざまな委員会がキャンプ中にさまざまな責任を果たすために作られた。以下の委員会である。

① 食料委員会
② 宿泊委員会
③ 登録委員会
④ 文書委員会
⑤ 旅行・予約委員会
⑥ 文化プログラム委員会

晩餐後それぞれの地域における代表者の活動について紹介と考えの共有をおこなうことが決定された。この会議はアイザック・カディルベル師が主宰した。そのときには朝の祈りと瞑想のために祈禱委員会が作られた。Mr. ジョーズ・ピーターが、全員一致で、アイザック・カディベル師、S・K・ボロ師、Ms. サビタ・カンブル、Ms. レベッカ、Ms. アシャ、Mrs. メリー・ディハム、V・アラム、そしてMr. チャンドラ・バブの助けと示唆を得て、この委員会を担当するために選出された。

一九九五年七月二八日朝の会議が、祈禱委員会の他のメンバーの参加を得て、S・K・ボロ師の指導する黙祈と祈禱で始まった。(故) Mr. アービンドとMs. サビタ・カンブルが一緒になって仏教の祈りを唱えた。瞑想の間は美しいバージャンが歌われた。

第一会議はDr. アイプ・ジョセフ師による基調演説で始まったが、それは以下のことに焦点をあてかつそれらを強調するものだった。

(1) 我々自身の状態を自覚しよう。

(2) すべてのダリットに我々が何者であるか知らせよう。——我々は新しいストーリー、すなわち、教育せよ、扇動せよ、組織

せよというストーリーを創り出さねばならない。

これらに続いて二つの主要なトピックが光をあてられたが、それらはキャンプの主要テーマや目標に関するものだった。

「ダリット青年の連帯における宗教の役割」——Dr. ジェームズ・マッセイ師は我々ダリット青年がその草の根、村落アイデンティティを自認すべきであるという目的をもって、与えられたトピックを特に強調した。彼はインドのダリットの多数は村に住んでおり、それ故に我々はあらゆるところで非常に共通した彼らの受難すなわち差別や暴力行為や抑圧を認識する必要のあることを代表たちにはっきりと指摘した。

そののちMr. ナゲシュ・チャウダリが「カーストの廃絶、ダリット青年の役割」というトピックについて以下の意見を述べた。

(1) リザベーションはブラーマン的宗教に対する抗議のしるしである。

(2) リザベーションはカースト廃絶のための道具である。

(3) リザベーションはいわゆるバックワードの人々のための憲法上の保障である。

彼は代表たちがその劣等感を克服するよう厳しく求め、我々ダリットは社会のいわゆるエリートの手から抜け出さなければならないと提案した。

そのとても豊かな経験から、Mr. チャウダリは、我々が一つの魂となって成長するために、我々のニーズ、権利、力のすべてを実際的なやり方で要求すべきである、と述べた。

こののち参加者たちは、Dr. マッセイやMr. チャウダリが光をあてたトピックについてグループ討論をおこなうために三つのグループに分かれた。

午後の会議では、二つの重要なトピックが討論されたが、それは、まず以下の人々がグループの前に持ち出したものだった。

ダリットの連帯における若いダリット女性の参加：Ms. メリー・ディハムは、あらゆる種類の暴力行為に苦しんでいるダリット女性の団結と向上のために村々で働くことは偉大なチャレンジであると言った。Ms. メリー・ディハムは農村女性のために施設センターを経営している。彼女はまた言った。社会のたいていの問題でダリット女性は犠牲者となっている。彼女らは肉体的にだけでなく精神的にも搾取されている。彼女らは第二あるいは第三のカテゴリーの人間として社会からの脅迫のもとにさえいるのであ

る。Ms. メリー・ディハムは以下のチャレンジを提唱した。

(1) ダリット青年はダリット女性を支援しなければならない。

(2) ダリット女性はいつでも差別や搾取や彼女らの問題に対してその声をあげるべきである。

最後に、アイザック・カディルベル師とMr. サンジェイ・ジウェインがダリット文化の保存：ダリット青年の役割についての論文を提示した。

論文の中で、アイザック・カディルベル師はダリット文化とその保存について語った。彼は文化とは何かをきわめて簡潔に定義した。文化は場所ごとに異なり、状況によって文化は三つの局面で見ることができるというのを知るのは興味あることだった。

(1) 肉体的

(2) 事実的

(3) 精神的局面

アイザック・カディルベル師は、有意味で実際的なやり方で、我々すべてによってダリット文化が保存され得ることに我々は気づかねばならないと述べた。ダリット文化の保存と促進における役割はさまざまなメディアを通じてのみ具体化され得ると彼は言った。

Mr. サンジェイ・ジウェインは、ダリット文化の歴史的な記録と公開を強調した。彼はダリット文化を強調して、ドラマや街頭演劇やセミナーやワークショップはダリット文化を助けることができると述べた。

一九九五年七月二九日

会議は朝の瞑想と祈りで始まり、次いで予定されたインドに関するプログラムが準備された。

全国は四つの地域に分けられ、そして各地域に関して召集者が任命され、地域的、準地域的、県、地方的レベルでプログラムを組織するために、ダリット間に自覚を指導し作り出すこととした。

四つの分割された地域は以下の通りであった。

(1) 南部地域

召集者　I・カディルベル師

(2)

北西地域

召集者　Mr.A・バッティ

(3)

中央地域

召集者　Mr.チトランジャン・ナグ

(4)

東－西地域

召集者　Mr.アショク・カンブル

上述の地域のすべての召集者は、時間と労力を投入し、その文化と状況にもとづいてプログラムを準備した。各グループのメンバーは何時間も座って働きついに最後の会議で予定された計画が提出された。

一九九五年七月三〇日

朝の会議は静かな瞑想とバージャンや歌を歌うことで始まり、続いてダリット問題に集中された。礼拝式は祈りとスピリットと団結で満たされた。

祈りと瞑想ののち、思想のオープンな共有がDr.ジェームズ・マッセイ師の招待から始まった。このキャンプの評価について知ることはすばらしい経験だった。その上参加者はDSPの成長についての見解や提案、またこのようなキャンプをより効果的で実りあるものにするよりよい方法を述べた。人々はわが国の一二の州から参加した。参加者の数は三八名であった。

この全インドダリット青年キャンプのための才知ある人物たちは、Dr.ジェームズ・マッセイ師、Mr.ナゲシュ・チャウダリ、Dr.アイプ・ジョセフ、アイザック・カディルベル師、Mr.サンジェイ・ジウェインそしてMs.メリー・ディハムであった。

最後に、我々は、ダリット連帯のこの精神がうなぎのぼりで盛大になり、すべてのダリットを団結と成長と発展という一つの旗の下に結集することを信じている。DSP青年部書記Mr.A・ラメイアの全体的な指導と積極的参加は、DSPの活動においてより積極的で有益なものになろうという奮起心の偉大な源泉であった。

我々はこの会議のホールに我々の行動計画を放置するのではなく、すべての我々のプログラムを、我々に属する個々のエリアで

大いに成功させるべきだということをまた承認しなければならない。我々はまたさまざまな州からきているけれども、我々の目標や目的は「ダリットの連帯」という一つのゴールにのみ至るということを記憶にとどめるべきである。

Dr. ジェームズ師は締め括りの演説を行い、そしてMr. A・ラメイアは感謝決議を提案した。

青年指導者訓練プログラム：ウスコタイ

青年指導者訓練プログラムは、一九九五年八月一七日―一九日、タミール・ナドゥ州のチェンガイ-MGR県、ウスコタイでおこなわれた。DSPの南部地域召集者のDr.V・デバサーヤムの指導のもとで計画されおこなわれて、三日間キャンプは三五名すなわち二五名の男と一〇名の女が参加した。最初の会議で指導的主唱者Ms.アンジェラインは、不可触賤民制、結婚、重婚、強制婚、生活権、財産権、暴力行為に関するさまざまな法律や、ダリットの生活状況に直接的関係を持っている他の法律について、参加者たちに伝えた。次の会議で参加者たちは、カーストの宗教-歴史的背景、カーストの起源としてのヒンドゥ主義そしてカーストにもとづく搾取について知らされた。

参加者たちの生活における目標のよりよき理解に達することができるように、グループ討論がおこなわれた。失われた基本的人権、この失われたアイデンティティを再獲得するための闘いに対する我々の個人的・集団的な責任と貢献、きたるべき世代への我々の責任がそれである。他のトピックは「ダリットの現実」「ダリットと運動の構築」「地方の青年の役割」そして「ダリットと経済的発展」を含んでいた。

反省会議では、幾人かの才知ある人々さえもが、これは彼らがまったく自由に自分自身と自分の見解を表明することのできた最初のプログラムであると述べた。参加者は以前のどれよりもはるかに明確な現実理解をしたという意見で一致した。

彼らの共有した経験のいくつかは以下に反映されている。

(1) さまざまなレベルでそのメンバーを持っているDSPは、教育や雇用に関連した主要な決定に発言権を持つべきであり、教育施設へのダリットの入学や新人募集に関連した悪慣行を正すことに関与すべきである。

(2) DSPはダリットに対する暴力行為を効果的に処理するために、郡、県、州そして国レベルで青年幹部を養成すべきであり、

そしてこの目的のために、ダリット青年が知識とマーシャル・アーツの技術とを身につけることができるようにすべきである。

(3) ＤＳＰはダリット・コミュニティの保護と振興のために働いているダリット青年に対して、教育的・経済的支援を保証するような長期プログラムを計画すべきである。

(4) 多くのダリット青年にダリットの大義のために活動するのを励ますよう、ますます多くの青年自覚化プログラムが村や県レベルで組織されるべきである。

(5) ＤＳＰは、さまざまなレベルでＤＳＰのプログラムを組織する過程において生ずるすべての問題を直接に処理する委員会を作るべきである。これらの問題は、ＤＳＰに関係するメンバーに加えられた差別あるいはいかなる形態の脅迫にも関連するものであるだろう。この委員会はダリット出身の法律専門家や与野党両方の政治指導者の支援を得るべきである。それはまた国際社会の支援を得るべきである。

新たなパラダイムの全国青年幹事会議

アジアキリスト教協議会（ＣＣＡ）、世界教会協議会（ＷＣＣ）そしてインド教会協議会（ＮＣＣＩ）によって組織されるアジア青年活動協議会が一九九五年三月一四日—二二日にインドのハイダラバードでおこなわれた。ダリット連帯プログラムからはMr. フランク・ビズワナス、Mr. テルトムド、そしてMr. アルビン・バッティが協議会に出席した。

この会議は、我々に他の参加者と見解を共有し運動についてより多くを学ぶという機会を与えてくれた。それは我々が指導者の資質を発展させ、アジアの社会—経済問題についてより多くのことを知るのを助けた。

この会議に出席した我々の仲間、アジアの友人のたいていは、インドのカースト制度や不可触賤民制の慣行を意識していなかった。我々はカースト制度に関する我々の経験を彼らと分かち持つチャンスを得た。我々は我々の仲間の参加者と我々の見解と経験を分かち持ち、そして彼らに我々の社会ではアンタッチャブル（ダリット）がどのように扱われているかを説明し、またダリットがいわゆる上層カーストの人々によってどのように搾取されてきたかをも説明した。

すべてのアジアの友人たちは、ダリット問題に全力をそそぐインド・エキュメニカル青年運動の必要性を感じた。

参加者たちはまた、ＤＳＰ（ダリット連帯プログラム）がどのようにしてダリット間で活動してきたかについて話しをされた。ダリットの権利のために戦う指導者組織の一つであるＤＳＰもまた、ダリット間で社会的自覚を向上させるために活動してきたのである。

すべての参加者は過去において教会がおこなってきた私心のない活動を評価した。今や教会はダリットの大義のためにコミットしてきており、ダリットの向上のために重要な役割を果たしてきている。

彼らはまた、ダリットの向上のための他のダリット諸組織の活動についても満足感を表明した。インドの原住民であるダリットは経済的かつ政治的諸問題にだけでなく、また不可触賤民制という社会的悪にも直面してきた。インドには何百というカーストがあるけれども、ダリットだけがその経済的あるいは政治的地位にかかわりなくアンタッチャブルとして扱われている。

もし問題が貧困のそれであるとすれば、その場合我々は解答を持つかもしれない。しかし不可触賤民制の問題は完全に異なったものであり、それはもし組織による集団的な闘いがなければ根絶され得ないものなのである。

青年たちはダリット運動に関するＤＳＰのプログラムに協力の手を差し伸べた。それは我々人民がダリットの直面する問題を強調するとてもよい機会であった。それは我々にダリットとその諸問題について知らなかった参加者に語りかける好機会を与えた。

会合はまた、我々が聖書の教えを今日の社会問題に適用するのを助けた。会合で討論されたパラダイムは社会的にバックワードなコミュニティを益するであろう。それはまた青年たちが社会奉仕に積極的に参加する必要性をも強調した。

バックワード・コミュニティの社会的覚醒はより多くのこのような会合をおこなうことによって発展させられるべきである。

以下のトピックが諸グループで討論された。

グループＩ

① エキュメニカル運動の再建

② 運動構築訓練

③ 指導者訓練

④ 民衆資料

⑤ 現実の中でのEM（エキュメニカル運動）の確認

a) 神学的基礎

b) 活動の性質

c) 交換・EM集団

d) ジェンダー——パートナーシップ

グループII

① 現在のCCA（アジアキリスト教協議会）青年プログラムを再確認

② 訪問・ネットワーキング・ポスト社会-文化の青年たち

③ 準地域のプログラム

④ 付加的トピック

a) 運動構築——運動構築とは何か——問題に基礎づけられた運動

b) ジェンダー——女性——分析の枠組み

c) 主要ワークショップのフォローアップ・プログラム

d) 全国的かつ国際的レベルでのさまざまな現実に立った自覚化プログラム

（周辺セクションすなわちダリットに焦点をあてたワークショップを通じて）

e) 各国に共通の問題を確認すべきCCA（アジアキリスト教協議会）

グループIII

① 青年指導者とエンパワーメント・プログラム

② ダリット緊急救助プログラムEYM協議会

③ キャンパス内閣

④ ソーシャル・オリエンテーション

⑤　交換プログラム
⑥　持続可能な青年プログラム
⑦　指導者技術訓練
⑧　青年と青年クラブ：連帯感

教育プログラム
①　教会所有の教育施設
②　職業訓練
③　青年のための奨学金と機会

社会覚醒プログラム
①　地元の人々に対するソーシャル・オリエンテーション
②　周辺的人々のための経済的、社会－政治的、文化的なダリット・プログラム

会合はとても有益であり、我々は会合を通じて多くのことを学んだし、またダリットに関する見解と経験を分かち持ったと伝えることができるのはとても幸せである。ＤＳＰの幹事長と代表と理事会のメンバーに感謝を表明する。

Ｐ・フランク・ビズワナス
Mr. テルトムド
Mr. アルビン・バッティ

一九九五年一〇月、デリーでのダリット連帯プログラム全国活動委員会の会合への世界教会協議会（ＷＣＣ）総書記とその一行訪問時における演説の交換

ダリット連帯プログラム代表、*Mr.* バグワン・ダスは語った。

友人や同僚の皆さん、DSP全国活動委員会のメンバーの皆さん、世界教会協議会のDr. コンラッド・レイザー、Dr. サムエル・コビア、Mrs. アルーナ・グナナダサン、ボブ・スコット師およびサロメイ・バース-ダディエ、そしてDSPに加わり、さまざまな信仰を持ち、さまざまな地域からやってきているさまざまなコミュニティのメンバーすべての皆さん。

わたしは主賓Dr. レイザーを歓迎します。わたしは世界教会協議会の最高幹部がこの行事にご出席くださったことを非常に幸せに感じています。我々は重要問題を討論するために会合するにあたって、ここで我々に加わるために貴重な時間を割いてくれたWCCの他のメンバーを歓迎します。

我々はさまざまな社会の出身です。多-宗教的、多-文化的組織であります。わたしはブディストです。わたしは、宗教の世界ではブディストが伝道者として外へ、世界へ出ていった最初のものであったと思います。主イエス・キリストのメッセージ、犠牲のメッセージ、同情と奉仕のメッセージをもって世界へ伝道者を派遣した第二番目の偉大な宗教がキリスト教でありました。

我々は、クリスチャンは片手に聖書を、もう一方の手に銃を持って世界へ出ていったと言った非常に著名な中国の作家リン・ユタンがいたことを覚えています。わたしはそれは真実の全くの戯画化だと思います。

伝道師たちは、片手に聖書を、もう一方の手に銃を持って出ていったのではありませんでした。それは、貪欲で強欲な商人や植民地主義者で、彼らが諸民族を、他の土地を征服しに行ったのでした。彼らは貪欲によって動機づけられていました。心に貪欲さを手に銃を持っていったのです。いまや宗教は、そして特に真に宗教的である人々は、強欲で貪欲な人々や肉体的快楽によって動機づけられた人々がなした悪行を正そうとしているのです。

WCCは世界の抑圧された人々の大義を取り上げるのに重要な役割を果たしてきた一つの組織です。ダリットの数はインドという土地に一億六〇〇〇万人を数えると言います。しかしその数は、わが国では人口調査の数字が政治的理由で操作されているので、はるかに多いのです。我々は指定カーストと呼ばれるアンタッチャブルについての政府の定義をうけ入れません。DSPは自らの定義を持っており、その定義はアンタッチャブルの起源をもつ人々であって、仏教やヒンドゥ教やイスラム教を信じている人々、あるいはアニミズム信仰の人々さえも含むのです。だから我々はより広い定義を持っており、DSPは彼らすべてを代表するのです。

わたしは多くを言うのを望みませんが、個人的に光栄に思っているし、またわが組織も光栄に思っていると考えます。なぜなら、WCCの最高幹部がやってきて我々に加わることが正しいことだと考えてくれたからです。この集会には、ダリット起源の人々、いわゆるインドの指定部族に属する人々がおり、かれらは実際インドの先住民族なのです。彼らはインド中に散らばって森の中に住んでいます。彼らはその文化、その伝統、そしてその言語を維持することができたのです。

もう一度、わたしは暖かく心からWCCの尊敬すべき客人たちを歓迎します。わたしはまたDSPを構成し、かつここに出席しているさまざまなコミュニティのすべてのメンバーを歓迎します。

我々は我々の客人を花輪で飾るという伝統を持っており、皆さんはそれをインドの伝統と呼ぶことができます。わたしは客人たちを花輪で飾るようDSPのメンバーに訴えます。

客人たちが花輪で飾られた後、WCC総書記Dr.コンラッド・レイザーは語った。

親愛なるMr.バグワン・ダス、Dr.ジェームズ・マッセイ、親愛なるインドのDSP全国活動委員会の皆さん、そして親愛なる友人たち。

WCC総書記としての現在の資格でインドへやってきた最初の訪問で、二日目でありますが、インドのダリットおよび先住民コミュニティの代表者としてのあなたがたとこの会合の機会を持つことは、わたしにとって喜びであり名誉であります。これは、WCC総書記がこの名誉を持つ最初のときであると思われ、それゆえわたしはこの事実を強調したいのです。

ナグプールで昨日を過ごした後にあなたがたを訪問できることはまた特別の名誉でもあります。我々はそこで、Dr.アンベドカルの仏教への改宗を記念する仲間のダリットに取り囲まれましたが、この改宗は意識を高めるのに重要な出来事として、インドのダリット・コミュニティにとって非常に意味のあるものだったのです。それゆえに我々の訪問がこの記念式典と一致したのは重要な事実だとわたしは思ったのであります。

そしてわたしは、我々の友人のひとりであり、皆さんの友人であるアービンド・ニルマルを思い出すためにも時を過ごしたいの

です。彼は思いがけなくも土曜日に亡くなりました。そしてわたしは、かれもまた属していたこのグループにおいて彼の記憶を想起することは全く適切であると思うのです。

このあなたがたの会合に、そしてわたしのインド訪問の初めに、あなたがたを訪れるためにやってきたのはとても特別の理由があるのです。Dr. マッセイはすでに今年のはじめ六月に委員会のメンバーの代表団がヨーロッパを訪問したことに言及しました。この訪問で代表団は、ジュネーブのエキュメニカル・センターにもやってきました。不幸にもわたし自身は代表団を迎えることができませんでした。そのときは西アフリカのWCCのメンバー教会を訪問していて不在だったからです。それで、ある意味ではこれは返礼訪問——ジュネーブで皆さんの代表団の訪問でWCCが受けたお返し——なのです。我々はこれに非常に感謝していますし、またこれは多年にわたって大きくなっている関係を強化するものでした。実際それはかなり長い過程であり、相互の注意深い承認であり、最終的には非常に特殊な協力形態へと至った我々独特のものなのです。

はじめてインドのダリット・コミュニティの状況に気づくことになった瞬間をわたしは想起せざるを得ません。皆さんはもちろんWCCのレイシズムと闘うプログラムを知っておられます。七〇年代終わりの決定的瞬間に、WCCはジンバブエの愛国戦線に基金を与えるという高度に可視的な、しかし非常に論争的になる決定をおこない、そして教会内部での、特にヨーロッパ内部でのにがい論争の中心になりました。一九八〇年代におけるレイシズムについてメンバー教会からアドバイスを収集する過程を先にしてから、世界協議会を開くことが決定されました。我々すべてにとって、はじめて、全く思いもかけず、インドの年配のダリット男性が会議手続きの只中に入りこみ、そしてこの会議に対してダリットの窮状と叫びを提示したのは、一九八〇年の夏、オランダでおこなわれたその協議会においてでありました。それはまだ組織された闘いではなく、ただの叫びでしたから、会合はそれをどのように扱うか全く分かりませんでしたが、しかしその叫びは回避することの困難なものでした。

インドにおけるダリット・コミュニティの排除と抑圧の問題を世界のキリスト教社会の焦点とし、その覚醒をもたらすにはなお多くの年月がかかり、わたしも覚えていますが、バンクーバーでの一九八三年のWCC総会で、現アザリア司祭の特に記憶すべき介入があったのです。

わたしは発展のすべての段階を体験する必要はありません。それは皆さんによく知られています。我々が今朝早く提示された演

劇で鮮やかに見たように、これが連帯についてのプログラムであるということが重要なのだとわたしは思います。連帯とはたぶん使い古されてきた言葉です。しかしそれは、我々が持っており、かつその重要性において最小限化されることを許すべきではない非常に貴重な言葉のひとつなのです。我々はその非常に特殊な意味を持った連帯という言葉を擁護すべきであります。それは、お互いに結合する人々の共同闘争の経験の中に、その場所を占めているのです。今朝の演劇で五人の演者が腕を結びあわせるイメージが、実際上連帯の意味するものなのです。一緒になって、皆さんに反対する力よりも強力になるようにお互いを強めること。非常に特殊な解釈が出てきたのは全く最近のことです。すなわち、闘争の外部の人々が闘争の内部の人々にたいして、自らの連帯を宣言し、その援助を提供するということが出てきたのです。

世界教会協議会の諸教会がこの関係の特殊性を理解すべくプロセスを学ぶことはとても困難でした。なぜなら我々の大部分にとって我々が闘争の一部であるということはうぬぼれであろうからです。我々は外部からの仲間にとどまるのでしょうが、しかし我々は我々を結びつける質の高い関係に関与しているのです。連帯という言葉を定義するのは、闘争のなかの人々、この場合にはダリット・コミュニティのそして先住民コミュニティの代表としての皆さんであるということを、我々は学ばなければなりません。

だからダリット連帯プログラムと連携するということが経験に学ぶもうひとつのことなのです。ダリット・コミュニティに対してなされる抑圧や不公正に気づくよう促されたことや、ダリット・コミュニティの窮状について何かを知ることによって学んだこと、適切なフォーラムでダリットとの連帯を表明する名誉を与えられること。実際わたしはこの機会が世界教会協議会に与えられたことに大変感謝しています。なぜならそれは、人種的あるいは民族的差別の諸形態、あるいは諸表現についての認識を広げたからです。こうしてそれは世界教会協議会を未探険の原野に導いたのです。

我々は白人人種主義の特殊な挑戦をなんとかかんとか扱うことができると感じました。それを無視してきたということではなく、それどころか、その特徴が多年の闘争で明らかになってきたのです。しかしあなたがたへのこの抑圧は、特にそれが何百年もの間目に見えない形で残っていたゆえにずっと微妙なものなのです。

そしてそれゆえにこの闘争の形態はまだはっきりと識別できないようなものであり、それはまた連帯の表明をずっと困難にしかつ同時に貴重にしているのです。

わたしはこの自発的演説で、代表団がジュネーブに我々を訪問したとき持ってきた、そしてまたヨーロッパの他の仲間に持ってきた非常に価値のある意見書に応えようとしてきました。わたしはWCCを代表して、この文書で明らかにされた意見に支持を表明したい。わたしは特に間-信仰的なやり方でダリット問題にアプローチするという我々の特殊なコミットメントを明らかにしたい。すなわち、ブディスト、シク、ムスレム、ヒンドゥやクリスチャン出身のダリット・リーダーを連帯の関係において一緒にするということです。宗教的忠誠が集団-相互間の抗争と憎悪を動員するためにしばしば誤用されてきた状態においては、それはますます重要だと我々は思います。このような状況のなかで、間-信仰的な基盤の上に組織されたDSPは、ダリット・コミュニティの直接的な関係のサークルをはるかに越えた重要な証人となるチャンスを持っているのです。

わたしはまた、DSPと我々の関係は、WCCのすべての部門でなされた仕事についての情報を共有するために、とても重要なのだと言いたいのです。ダリットの認識と経験が、WCCのさまざまなプログラムの強調点に影響を与えることが重要だとわたしは思います。彼らはわたしの同僚のボブ・スコットの取次ぎでPCR（WCCのレイシズムと闘うプログラム）で最初に接触しましたが、しかしこれら最後の二つの指摘に関しては、わたしはもちろんすでにPCRの特殊な関心をはるかに越えて進むようにという含意を示してきました。こんどはあなた方もその判断、評価、対応を我々と共有するために、自由に感じ、勇気づけられそして招待を受けることを我々は希望します。その結果それは純粋な交換過程となるのです。

ちょうど今世界教会協議会は、二一世紀に入るので、レイシズムに対する闘いへのコミットメントの諸形態を再評価しようとしているため、このことは特に興味深いのです。この努力において分析の最初の試みはいわゆる「レイシズムに関する骨格文書」においてなされました。これは、レイシズムのこの挑戦の主要特徴は現在何なのか、また今後どうなるであろうかということを特定しようという試みなのです。ちょうど今我々は多くの地域や多くのコミュニティの仲間たちとこの予備的分析の試みを共有しはじめています。これが意味をなすかどうかを見るため、一方的な強調というギャップに気づくようになるためにです。だから我々はこれを皆さんと共有したいのだし、もし皆さんがそのコメントを我々と分かち持つ準備があればとても感謝するでありましょう。

皆さんにちょっとしたお返しの贈り物を贈ってわたしの説明を終わることにしたいと思います。それは皆さんが我々と共有した贈り物ほど貴重なものではなくて、ある意味では代表団がジュネーブの世界教会協議会を訪問したときに彼らにおくった贈り物の

続きなのです。（ジュネーブで代表団におくった）あの五枚の画はダリット連帯プログラムとの関係における世界教会協議会のコミットメントをシンボル化することを意味する画像です。それはDr. アンベドカルによって定式化されたような憲法の諸原則へのコミットメント、とりわけ女性の闘いへのコミットメント、土地へのコミットメント、アイデンティティへのコミットメント、そしてダリットの崇高性へのコミットメントを表明するものです。我々にとってこれらの特別のコミットメントは、エキュメニカル・コミットメントの、エキュメニカル運動の、すべてのクリスチャンの、基礎についての我々の理解の一部なのです。それでわたしが皆さんに持ってきているものは世界教会協議会の旗印であり、わたしはこれを適切な場所に置くことに同意されるよう希望するものです。

その次に、DSP執行部理事Dr. ジェームズ・マッセイ師が語った。

Dr. サムエル・コビア師はWCCのユニットIIIの執行部理事です。ここには、この世界的な家族との我々の関係の歩みと、彼らのコミットメントを履行するために彼らがそこで提供した行政的活動があるのです。我々の関係は（それはWCC内部で分けられているやり方です）ユニットIIIを通じておこなわれており、Dr. コビアが我々とともにいるのはとても幸せなことです。彼は、ある段階では我々とここにいることを予定されていませんでした。しかし我々の側から圧力をかけられそして彼は同意したのです。たぶん彼の他の同僚もまた彼に圧力をかけたでしょう。なぜなら、ボブ（スコット）やサロメイ（バース-ダディエ）と直接に連帯して我々とともに活動しているのは、彼が長となっているユニットだからです。だから我々がここにあなたを迎えることは幸せなのであり、わたしはあなたがユニットを代表して一言述べるようにお願いしたいのです。

WCCユニットIII執行部理事、Dr. サム・コビア師

DSP代表のMr. ダス、尊敬すべき幹事・理事Dr. マッセイ、兄弟姉妹の皆さん。

今日ここに皆さんとともにいるのは、わたしにとってダリットの人々との長いかかわりあいのなかでの頂点であります。個人的に、わたしに理解できるやり方で、わたしがダリットの人々がどのような状態でいるかについて知るようになった最初のときは、都市地方使節団（URM）助言グループに加わったときでした。一九七五年のWCC・URMです。わたしは「理解できる」やり方と言います。なぜならケニアの出身者としてわたしはイギリス植民地主義者の書いた歴史を学んだからです。世界の他の地域について我々が学んだものは何であろうと非常に貧弱なものでした。わたしは以前にこのような言葉に出会ったことがあったけれども、それは、ダリットの人々は文明化されることに抵抗した人々のカテゴリーに属するということを信じさせるような仕方においてでありました。皆さんが自分自身植民地化された人間である場合は、本で学んだのとは違った仕方で状況を知るようになると思います。それは実際とても異なったものなのです。

それで、のちにわたしがダリットの人々をもっと知るようになったとき、わたしは即座にケニア出身の人間としてダリットの人々の熱望に共鳴しました。それからわたしが一九七八年にURMでWCCのスタッフに加わったとき、ダリットの闘いがWCCにおいて明らかに知られるようになる以前に、URMは転覆活動を多少とも支援していたのを思い出します。それゆえに、より広いエキュメニカル運動の内部では一九八〇年代までは多くは知られることはなかったけれど、わたしはダリットについて知っていたのです。そしてこの問題が、コンラッドの言ったようにとても劇的な仕方でWCC全体としてより十分に受け入れられるようになったのは、もちろん一九八三年のことでした。

わたしが一九八九年にPCR（レイシズムと闘うプログラム）委員会の副議長としてマドラスにやってきたとき、ルス・マノラマに会ったことを覚えています。なぜなら彼女は、PCR委員会のところへやってきたダリットの人々のグループを組織した人だったからです。

今日わたしがここに来ているのは本当にそのプロセスの頂点であるとわたしが言う理由はそれなのです。最初にアルーナ・グナナダサンが総書記の旅行にわたしの同行を求めたとき、わたしは受け入れるべきかどうかあまりはっきり分かりませんでした。しかしジェームズが言ったように、DSP代表団がジュネーブを訪問中穏やかな圧力がかけられ、わたしははっきりノーと言えなかったのです。だからわたしは今日ここにいるのであり、そのことをとてもとても感謝しています。もうひとことかふたこと言わせ

てください。なぜならわたしは挨拶をしてDr. レイザーが言ったことに付け加えることだけを実際求められたからです。

わたしが言いたいひとつは、DSPのやっていることはエキュメニカル運動に多くのことを教えることができるということです。わたしは我々が貢献できる以上に皆さんから多くのことを学んでいると思います。DSPのアプローチ、概念、目標はそのもっとも広い意味で本当にエキュメニズムなのです。それは同じ国民のコミュニティ内部でなされているけれども、皆さんのやっているグリットと先住民との間の対話は、エキュメニカル運動にとって実際とても重要なことなのです。なぜならそれはエキュメニカル運動の目標のひとつであり、役目のひとつだからです。皆さんのやっている信仰-相互間のかかわりあいは宗教の境界を越えた人類の団結を意味します。そしてこの人類の団結と教会の団結はご存じのようにWCCの目標なのです。それゆえにわたしはこの信仰-相互間的なかかわりあいは、エキュメニカル運動がそれから学ぶことができるものである、と言いたいのです。

DSPとユニットIIIのことについてもっと言うと、ユニットIIIにおいては正義と平和と神の創造物の完全性を説きますが、DSPは平和と正義と創造物の完全性のうちに生きる方法を我々に教えているとわたしは言いたいのです。皆さんはそれを生きているのであり、この分野で権限を委任されまたそのプログラムを持つ世界評議会のユニットたる我々にとって、皆さんから我々が学んでいることはたくさんある、と言いたいのです。――なぜなら皆さんはその日常生活においてそれを生きているからです。

ユニットIIIの三つの主要な推力の一つの面である創造物は、たぶん我々が正義や平和ほど十分に発展させてこなかった一つの面であろうとわたしは特に言いたいのです。それで我々はこの事柄を正義や平和と同等にしていくために闘っているので、皆さんのやっていることはきっと我々がそれから学ぶことができるものであると言いたいのです。我々が今日早くに演劇や歌から学んだように、土地や水や森やアイデンティティの問題は、WCCの我々よりも皆さんがずっと十分に取り上げてきた活動の局面なのです。それは、我々がどのようにして神の創造物と人間が共生しなければならないかを示そうと努力しているように、創造物の完全性が意味するものなのです。

創造物の輪郭を高めるようにというユニットIIIの試みでは、たぶんラテンアメリカでおこなわれるでしょうが一九九六年五月に「創造物フォーラム」と呼ぶ計画を我々は持っています。そしてDSPがこの「創造物フォーラム」に活気を与えることのできる方法を我々は見出さねばならないとわたしは言いたいのです。ボブ・スコットと一緒にです。方法はあるでしょう。今のところそ

れがどのようなものであるかは言えませんが、そのフォーラムで我々はきっと皆さんの経験を持つことは約束ずみだということは言えます。

その場合には我々が過去においてDSPと関係を持ってきたことを誇りにするとともに、将来においてDSPから学ぶという特権を持つであろうとわたしは言いたいのです。この保証はWCC総書記以外の何ものによっても与えられはしませんでした。そしてそれゆえに、我々がこのことに口ごもるなんらかの理由があったにしても、今や絶対にいかなる理由もなくなったのであり、それゆえ我々は皆さんとともにあり続けるでありましょう。

以下のことを述べて終わりにしたいと思います。我々が見た演劇でお互いに腕をくむことによって表現された連帯は、わたしに「鎖はその最も弱い連接環（リンク）の強さと同じである」ということわざを思い出させました。また、DSPは皆さんが最も弱いリンクであると考えるものを強めるという巨大な責任とやりがいを持っているのだということを知りました。なぜならそこが鎖の壊れるところだからです。皆さんはこの責任をおっており、皆さんが闘争のこの決定的段階に入りこむときにはこれは大きなやりがいとなるのです。

ユニットIIIは皆さんと共にあるということを我々は皆さんに保証したいと思います。教義がエキュメニカル運動にそうするよう強いるからだけではなく、また利己的な観点からも、我々は皆さんから学ぶべき多くのものを持っているからです。それゆえに我々は皆さんと共にあらざるを得ないのです。そして我々はきっとそうするでしょう。ダリットの連帯、万歳。

そのつぎにDr.ジェームズ・マッセイ師が語った。

我々は今や我々の姉妹アルーナに呼びかけます。我々は皆一つの家族なので、兄や他の兄弟に呼びかけてきました。しかしアルーナはここにいる我々の出身なのです。そこで我々は彼女にファーストネームで呼びかけて彼女との連帯を示すというじかの権利を持っているのです。我々を代表して彼女はWCCにおり、そこでこの国の代表として責任を果たしています。彼女がチームの一部であるのは我々の幸せであり、そして彼女はチームを我々のところへ導き、教会やそしてダリット・コミュニティの先頭に立っ

ているのです。そこですでに述べられたことに付け加えることを彼女に求めたいと思います。

Mrs. アルーナ・グナナダサン（ユニットIII、WCC）

コンラッドがこの訪問を組織するのを手伝うことにわたしが同意したときには、それがどんな特典になるのかを認識しませんでした。わたしはインド人スタッフのひとりであったから、なすことを期待されていることがまさに課題なのだと思いました。しかしわたしは実際に特典を与えられました。わたしの旅行するあらゆるところで突然にすべてのわたしの友人に会うからです。わたしはまたチームとともに旅行するのと同じぐらい多くのことを学んでいます。

コメントは簡単にしましょう。なぜなら皆さんが話すことが重要だと考える事柄のいくつかについて、もし可能ならば、皆さんと討論することが重要だと思うからです。

わたしは一九九一年にWCCのスタッフに加わり、また女性プログラムに参加しました。「レイシズム下の女性」というプログラムが立てられたのはそのあとすぐのことでした。誰がその仕事をとるのか、またそれはどんな種類の輪郭をとるのかについての討論の一部を記憶しています。レイシズム・チームのなかの同僚には、我々がレイシズム下の女性に焦点をあてることが必要なのかどうかあまり確信を持っていないものもありました。そして彼らはそれが女性プログラムの一部となるべきであることをわたしに納得させようと努めていました。レイシズム関係は「地方の発展における女性プログラム」の一部であり得るということが提案されたのです。しかしはじめからわたしはこれを拒否しました。なぜならレイシズム下の女性という女性問題については何か特別なものがあり、そしてプログラムは持つに値する輪郭を持たねばならないと信じるからです。

今や我々はレイシズム下の女性というプログラムを持ってわたしはとても嬉しいのです。皆さんの多くはマリリア・シューラーを知っていますが、彼女がプログラムの長なのです。このプログラムはWCCの女性に関する活動に対するよき対照物（カウンターパート）です。女性は、我々の友人が今朝の演劇で指摘したように、グリットのなかのグリットです。我々グリット女性の問題を真剣に取り上げなければなりません。なぜならグリットの女性はご存じのように、グリットであるがゆえに社会において抑圧に

直面するだけではないのです。彼女らはまた、女性であるがゆえに特別な抑圧形態に直面するのです。より大きな社会からだけではなく、ダリット社会それ自体の内部においても抑圧に直面するのです。

それ故女性問題に特別の考慮を払うようなプログラムを持つことの緊急性についてわたしは考えるのです。我々ダリット姉妹がWCCシスターズ・プログラム（レイシズム、カースト主義、性差別主義を排除するために闘争するシスターたち）の一部であることがいかに重要であるかをわたしは強調できないのです。

「女性と連帯するWCCの教会のエキュメニカル一〇年」は、四つの焦点となる分野を特定しており、そしてレイシズム下の女性はその四つのうちの一つなのです。我々はWCC内部で討論に入り、そしてダリット女性の声を我々の運動に持ち込もうとする多くのやり方を持っているのです。皆さんは我々のビジョンを拡大するよう助けることができるのです。

北京でダリット女性の存在をみ、そして彼女らがおこなっている多くの事柄をみるのは大きな喜びでした。彼女らは多くのプログラムをおこなっている多くの場所にいたのです。あるところでは彼女らはデモをやっていました！小集団ではありましたが、我々のダリット姉妹たちがその世界会議でこのようなインパクトを与えるのをみるのは、わたしにとって全くすばらしいことでした。皆さんはこのことについて聞いたかも知れませんが、わたしはそこに出席した女性の小集団が北京のイベントに重要な貢献をなし、そしてその存在を感じさせたことを皆さんに知ってほしかったのです。我々はそれについて我々のダリット姉妹たちに感謝すべきであります。

ジュネーブに移ってのち、ここの女性運動で働いていたとき以上に、わたしは人種抑圧の問題を真剣に取り上げねばならないことを認識するようになりました。なぜなら世界にレイシズムのあるかぎり女性を解放することはできないからです。それゆえに、女性と連帯して立つことを我々が教会に厳しく迫るとき、我々に生気を吹き込むのに、ダリット女性運動の大きな重要性、先住民女性運動の重要性、そしてWCCでのシスターズ・ネットワークの重要性があるのです。もし我々がレイシズムあるいはカースト主義の下での女性に特に焦点をあてない場合には、我々は世界の女性という大きな部分に対して重大な不正義をおこなっているのです。この相互作用は重要であり、厳しく迫ることは重要です。我々はシスターズ・ネットワークと親密に活動しています。皆さんが我々にこのことを絶えず思いださせるようにし続けてくれることを望むものです。

その次にWCCのスタッフで、WCC・DSPの関係に責任を持つメンバーであるボブ・スコット師が語った。

わたしは今朝ここに到着したとき一種のアイデンティティ・クライシスに陥ったといっても、総書記はわたしを理解してくれるのを知っています。わたしはWCCのスタッフのひとりであり、皆さんはWCCに挨拶をしていました。しかしわたしは昨日一日中皆さんとともに働いてここにいたので、今朝はわたしはWCCにいないと思いました。だからなぜわたしが歓迎されていたのか、というわけです。

しかしわたしの頭では、そのアイデンティティとは何かについて全く明白なのです。わたしのDSPへのコミットメントはわたしの人生の大きな部分です。それは言うに十分なものなのです。

皆さんが今日ここでWCCを、特にキリスト教の伝統とは異なった出自をもつ人々を迎え入れる準備をされたことをわたしはとても感謝しています。我々を迎えいれ、とてもうまく迎え入れてくれて皆さんは幸せです。わたしはとても感謝しています。

そののちDr. レイザーが質問に答えた。これには、WCCのコミットメントは、現在のスタッフがもはやWCCにいなくなった時点を越えて続くのかどうかについての質問、確かな連帯の印とは何なのかについての意見、この連帯の経験におけるWCC、DSPあるいは他の何らかの仲間にとっての獲得物よりもむしろ、連帯における共通の獲得物とは何なのかについての質問、そして世界のすべての他の抑圧された諸国民や人種とのDSPの連帯の表明を含む。Dr. レイザーは言った。

WCCの表明したダリットの闘いへのコミットメントの有効性や信頼性について答えましょう。これは、WCCがレイシズムに反対し、先住民の人々の立場に立ってWCCが受け入れてきたより大きなコミットメントの一部なのだという事実を指摘できるだけであります。それは、ひとりの総書記からもうひとりの総書記へと、総書記の四代以上にわたって継続されてきたのです。このことはダリットの連帯へのコミットメントに関しても同様に真実であるのは疑いありません。わたしの同僚で、全体としてプログラム・ユニットに責任をもっているDr. コビアはこれをもっと特別なものにしたいかもしれません。しかし全体としてのWCCに

関する限りは、これは理事会による公式の決定にもとづいているのであって、単なる個人的なコミットメントや関心の表明にもとづくものではないのであり、スタッフの特別のメンバーの一部やあるいは総書記の意向にもとづいているのではありません。

そして第二に、この文脈において皆さんがかかわっている特別のイニシアティブ、皆さん自身のコミュニティに注意を払いたいと思うこと、その点ではダリット連帯プログラムがどの程度まで援助を受けるのかしらと思うのは、全く理解できることです。その点ではわたしは次のように述べることで我々の精神をあらわすと思います。これは我々が決定すべきことではない。それは皆さんが決定することである。連帯行動の形や場所や優先性が何なのかを決定するのは皆さんである。我々は手伝うことはできるが、皆さんに代わって選択をするものではない。そして我々は、連帯の表明として、ともに従事すべき最も重要な課題は何なのかについては、皆さんの判断、その集団的判断を信頼するであろう、と。だからダリット連帯プログラムがコミュニティ・プロジェクトの外部的基金の別の便利な形態にならないようにしましょう。このような基金の源は数多くあり、そしてWCCは多くの他のやり方で、インドでは特別のコミュニティ・プロジェクトを援助しているのです。ダリット連帯プログラムは基金プログラムではありません。それは連帯プログラムなのです。そしてその特別の性質が我々の共通の関心であるべきだとわたしは思うのです。

WCCの演説者たちを締めくくるにあたって、DSP代表 *Mr.* バグワン・ダスは語った。

インド各地からの友人たちによって述べられたことに特に関連して、わたしは一つの立場を明らかにしたいのです。アンタッチャブルはDr. アンベドカルの指導の下で一九一七年以来闘ってきました。我々は自らのアイデンティティを確立しました。我々は最も友人のない人々です。教会も、イスラムの世界も、汎イスラム主義の指導者も、いかなるものも世界中でその問題に関し我々を助けませんでした。我々が問題をかかえていることもまた見極めさえしませんでした。しかし我々は誇りをもって言います。Dr. アンベドカルの有能な指導の下で、我々は他のいかなる人々も、世界中の不安定なあるいは抑圧されたマイノリティも達成できなかったものごとを、この世界で達成することができた。我々はその潜在能力、その手腕、その才能、その知性に十分な確信をもっている。我々は誰にも依存するつもりはない、と。そしてもし諸君が覚えているならば、このホールの外で上演された演劇作品の

最後の宣告は、ブッダの教え「なんじ自身に対する光たれ」からとられたものでした。我々はDr. アンベドカルが繰り返し述べ我々に与えたメッセージ、これは最も偉大なものですが、それに従ってきました。我々はWCCがなしてくれたことに感謝します。いまや我々の問題を認識しようとしている友人がいることで我々は幸せです。しかし我々は少額の財政援助のような獲得物のために、その独立、そのアイデンティティを捨てるつもりはありません。しかし我々は尊敬すべきゲスト、Dr. コンラッド・レイザーによって約束された連帯を評価します。我々はそれを評価するものです。そしてWCC、あるいはその問題に関して我々と連帯する何らかの他の組織とその種の関係を持ちたいと思います。

わたしは明確にするためにだけこの言葉を述べています。なぜならときどき人々はダリットについて間違った印象をもっているからです。我々は沈黙の犠牲者です。しかし我々は決して目を閉じることはありませんでした。我々は目を開けてきたのです。このホールから出ていくすべての者がそれを心に抱かなければならないとわたしは思います。

それからDSP指導者チームの青年指導者、A・ラメイアが感謝決議を提案した。

Dr. レイザー、Dr. サム・コビア、Ms. アルーナ・グナナダサン、そしてもちろん我がボブ・スコット師およびサロメイ、この式典にあなたがたを迎えることは実際DSP家族全体にとって大きな名誉であります。我々はWCCについて多くのことを聞いたし、特にわたしはジュネーブへ行ってあなたがたと個人的に対話するという機会がありました。しかし我々の多くは一度もWCCについて聞いたことがないのです。我々が聞き、あるいは見たものはすべてボブ・スコット師を通じたものでした。だから我々はここにいてWCC総書記としてのあなたのDSPにたいする直接の約束を聞くのは偉大なる機会なのです。

この感謝の一部としてわたしはわが代表が述べたことをまた再び強調したいと思います。あなたは言われました。ダリットの大義へのWCCのコミットメントについて我々は我々自身の感情を共有すべきだ、と。あなたはインドの歴史を知っています。我々のこうむった植民地化等々の歴史を。とくにヒンドゥ教徒の間では、我々は時々なお同意するのですが、白い皮膚を持ったものへの恐れがあるのです。今日彼は約束するかもしれない、明日にも彼は去るであろう、と。そしてそれが歴史だったのです。個人的

にではなくて、それがインドの多数の感情であるがゆえにわたしはこう言っているのです。より高いインテリでさえもそうなのです。わたしが彼らとアカデミックなレベルで交流するとき彼らは言います。「ああ、あなたはクリスチャンと親密につきあってきたのですね。クリスチャンに改宗したのですか。」と。それは名誉なことではないが、インテリでさえもこうした方向で語るのです。そしてそれは大多数の人々の感情なのです。その恐れは我々の中にもたくさんあります。この恐れから抜け出るためには、わたしはＷＣＣはとても長い道程を行くことになると思います。その時その時に、あなたがあなたの言葉と行為のそばにいる——単に言葉のそばにではなく——ことが判明しなければなりません。どちらを意図するのかなのです。再びわたしは我が代表が言ったことを強調します。カースト制度に対し反対の信念を真に持つ個人と組織の信頼を我々は発展させるのだと。それはあなたが我々を信じ、我々を信頼するという点から明らかにされ得るのです。我々の貢献に信念を持ちましょう。

たいていの場合に起こることは我々が色（カラー）にもとづいて決めるということです。再び言えばそれは西洋世界の貢献です。あなたがダリットとの連帯を示すことができる一つの方法は、ある問題がダリットに関して出てくる時はいつでも、それはわたしの個人的なまたダリット家族全体の要求でもあるのですが、あなたの最初の相談相手はダリットであるべきであってノン・ダリットではない、ということです。これは、ここインドにおけるノン・ダリットが常にダリットに敵対的だということを意味するのではありません。否です。とても多くの献身的なノン・ダリットがいることをわたしは知っています。しかしそれは我々自身の恐れなのです。それは我々自身の限界であり、我々自身の狭量なのです。この恐れはそこにあるのです。だれもこれを否定できません。ダリットについて話すダリットたちは、我々がノン・ダリットとダリットについて話すよりもお互いにより信頼を発展させます。なぜなら我々はとても厳密に見極めるからです。これは我々がダリットの大義に献身的でない人を受け入れないということを意味するのではない、という点を繰り返しておきます。否です。

最近我々はナグプールでプログラム——青年プログラムをおこないました。我々はＮＣＣＩ（インド教会協議会）から、特にアイプ・ジョセフ師から大きな支援を受けました。彼はたまたまノン・ダリットですが、しかし我々はとてもくつろいだ気分になりました。同様に、ダリットの大義に対するＷＣＣの連帯は、インドのおけるメンバー教会の非常に直接的な貢献を得ることができます。それは我々がプログラムをおこないたい時はいつでも何も問題がないということを意味します。わたしは目を閉じてアイプ

師のところへ行き、このプログラムが必要だ、助けてくれなければならない、と言うのです。わたしはその確信を発展させました。なぜならアイプ・ジョセフ師はＷＣＣ指揮下の人物として、とても暖かいやり方でＤＳＰが機能するためのこれらの条件を作り出してくれたからです。しかしそれはインド中の多くの教会についての実情ではありません。たいていの教会においてはそうではないのです。

だからあなたが我々を信頼するということがわたしの個人的な要求であり、そしてこれがＤＳＰとの連帯を示すことのできる唯一の方法なのです。

宣教師はインドのダリットにクリスチャンになるよう援助しましたが、それは真の意味においてではなかったとわたしは言いたいのです。宣教師は、彼らに聖書に書かれていることを知るよう援助したのであり、ヒンドゥ教を捨て去るように援助したのではありません。彼らは依然としてヒンどゥ教徒に止まっているのです。ＷＣＣがそれに果たす役割は大きいものです。

あなたが我々が何を感じているかを尋ねたので要求の言葉を若干述べましたが、それとともにわたしは、あなたが我々とともにあること、そして大きな激励の源であることに正式に感謝したいと思います。そして我々はあなたの支援で闘い続けることができるという大きな希望を持っています。財政的支援そして特に道義的支援を得てであります。さもなければ財政的支援はこないでありましょう。

そしてわたしはまた、ＷＣＣのこのコミットメントは腹をすかせた誰かにパンを投げ与えるようなものであるべきではないと言いたいのです。しかしこれもコミットメントなのです。あなたは人間として、組織体として、人間性の大義にコミットした空腹の人間に何かを投げ与えるだけであってはなりません。我々はすべて人間として、我々自身の仲間の人間を助けるあらゆる道義的権利を持っています。我々がＷＣＣに援助を頼るのはその理由にもとづいているのです。それでこれらいくつかの注釈とともに、わたしはＤＳＰ家族全体を代表して繰り返します。あなたが我々とともにあり、我々を助けてくれることを心から喜ぶと。

今やわたしはサム・コビアのところに来ました。わたしは色の関係であなたに非常に親密さを感じます。事実密接な類似性があるのです。わたしは幸せに思います。あなたがここにいるからわたしはより親密さを感じるのです。これらの色のバリアさえも超越する個人が幾人かいます。その誉れはボブにあるとわたしは言いたい。多分我々は彼が我々とともに働いていたやり方のために

信頼を発展させたのです。我々では色のバリアを抜け出ることはできなかったでしょう。だからわたしはそれはあなたにあてはまることだと確信します。それでDSP家族を代表して、わたしはあなたが我々とともにあり、我々を助けるすべてに手を差し出してくれたことにとても感謝します。

第三番目のゲストは、被抑圧者のなかの被抑圧者、ダリット女性について語ったとても重要なゲストです。我々の友人ルスは、女性は三倍抑圧されていると言うのが常でしたが、全くその通りです。そして彼女らは五倍抑圧されていると時々我々に語っています。それはダリット・コミュニティ内部の問題の大きさを反映しているに過ぎないのです。代表団がジュネーブにいた時、アルーナは我々のために非常に助けになりました。彼女はとても気をつけてくれて我々みんなをあちこちに連れていってくれたからです。それでDSP全体を代表して、訪問者を我々のところへ連れてくるために苦労してくれたことに対し、我々はじかにあなたに感謝します。

これらいくつかの注釈をもって、わたしはここにいる先住民の友人を含めて皆さんがたひとりひとりに感謝します。我々すべては、このプログラムを成功させたことに関して我々すべてに感謝するものです。まだ依然として歩む道は遠いのです。

［了］

（追記）

DSP代表バグワン・ダス氏は、昨一九九八年一一月二五日—二七日に日本で開催された「世界人権宣言五〇周年記念・アジア・太平洋人権教育国際会議」に出席するため来日した。来日を機会に、一一月二一日全国大学同協企画のインドカースト制度現地研修参加者による歓迎会をおこなったが、その席で、ダス氏は以下の点を明らかにした。

① DSPは、Dalit Solidarity Programme から Dalit Solidarity Peoples に名称変更したこと。

② DSPは、ダリット政治指導者にたいして、DSPの理念、目的の実現をめざしてその統一を働きかけるが、それが実らない場合には、五年後に独自の政党結成に踏み切ること。

現在、インドは「ヒンドゥトヴァ」の強調にともない、ダリットやクリスチャンなどのマイノリテイにたいする襲撃事件が多発

している。このような状況のなかで、諸宗教を横断して、ダリットの統一、先住民との共闘、ダリット問題の国際化を実現しようとするＤＳＰの活動はますます大きな意味をもつように思われる。ダス氏をはじめ、ＤＳＰの諸活動を支え続けている人々に限りない敬意をはらいつつ、本訳稿を閉じる。